

中国の就学前教育における子どもの「主体性」の育成に関する考察 ——「3～6歳児の学習と発達ガイドライン」の計量テキスト分析による——

今中 博章⁽¹⁾・劉 郷英⁽¹⁾・上山 瑠津子⁽¹⁾・池田 明子⁽¹⁾・高澤 健司⁽¹⁾

本研究の目的は、中国の「3～6歳児の学習と発達ガイドライン」の特徴を、とりわけ、子どもの「主体性」の観点から明らかにし、それを踏まえて、中国の就学前教育における子どもの「主体性」の育成について考察することであった。「ガイドライン」のテキストを分析対象とした計量テキスト分析の結果を踏まえ、次の考察がなされた。(1)「主体性」や「主体」の語は抽出されなかったが、関連するいくつかの語が抽出されたことから、「ガイドライン」は子どもの「主体性」を尊重し、育むことを重視していることが考察された。(2) 階層的クラスター分析の結果から、「ガイドライン」の文中には、子どもの「主体性」を育むうえでの留意事項が含まれており、教師や保護者にとって、まさに手引き的な内容を「ガイドライン」は含むことが考察された。(3)子どもの「主体性」の2つの側面の育成に関することが、それぞれ「社会」領域と「芸術」領域に含まれていることが考察された。

キーワード：就学前教育，中国，主体性，3-6歳児学習と発達指南，テキストマイニング

1. はじめに

近年、グローバル化する社会の中で、多様な価値観をもつ人々と協働しながら主体的に生きていく人を育てることを重視した教育改革が、各国において進められてきている。日本では、平成29年（2017年）から平成31年（2019年）にかけて、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領などが改訂されたが、その際にもこのことは重視された。日本と同じく東アジアに位置する隣国の中国でも、「改革開放」以降の近年の教育改革のなかで、このことは重視されてきているところである。

李（2015）は、近年の中国の教育改革において「主体性」が重視されてきたとし、「主体性」という概念の持つ意味内容を明らかにする研究（日本語で執筆された研究）を行っている。李（2015）によると、中国では、文革終結後の1970年代末、文革期間中に人間が無産階級闘争の道具にされていたことに対する反省が全国規模で盛んに行われたことを背景に、人間

の「主体性」が注目され、「主体性」という概念が中国の哲学分野で率先して、論じられるようになった。その後、「主体性」をめぐる議論は次第に、文学、美学、歴史学、教育学分野へと広がっていった。ただし、中国では、「主体」という言葉は辞書にあっても、「主体性」という言葉は辞書にないということが示唆するように、さまざまな学問領域で議論されてきた「主体性」概念は、学問領域間でかなり異なる。李（2015）は、儲（1989）の論文を、中国の教育学分野において、初めて「主体性」概念を扱った論文と位置づけ、その論文が発表された1989年から2010年までの間に、中国の教育学分野において発表された、「主体性」概念を扱った論文の「主体性」概念の意味内容を検討した。そして、「中国において、教育研究分野で論じられている「主体性」は「自主性、能動性、創造性」を含み、「社会性」とも関係する概念であり、個人が、自らの意思にしたがって選択を行い、事物に積極的に関わる自立した態度や新しいものを作りだす創造的な意欲と

⁽¹⁾福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: h-imanaka@fcu.ac.jp

能力, また, 社会をより良くするために他者との協力や連携を保つ態度と能力である」と結論した。本研究での「主体性」概念は, 李 (2015) のこの定義に倣うこととする。

ところで, 2010年7月に, 中国政府は「国家中長期教育改革と発展計画要綱 (2010~2020)」を公布した。この要綱では, 就学前教育を今後10年間の教育改革の上位8つのタスクの1つに位置付け, その計画と展開の概要を説明するために1章が割かれている。そして, 「就学前教育の普及という基本的な発展目標」が掲げられ, 2020年までに, 義務教育前の1年間, 2年間及び3年間の幼稚園への就園率を, それぞれ95%, 80%, 70%に引き上げるという目標も掲げられた。また, 同年には, 国務院より「当面の就学前教育の発展に関する若干の意見」も公表された。このような改革動向のなか, 2012年に教育部 (日本の文部科学省に相当) より公布されたのが, 本研究で分析する「3~6歳児の学習と発達ガイドライン [3-6歳児童学習と発展指南]」 (以下, 「ガイドライン」とする) である。2001年に教育部より公布された「幼稚園教育指導綱要 (試行)」 (以下, 「指導綱要 (試行)」とする) に対して, 同じく教育部より追加公布されたものがこの「ガイドライン」である。なお, 「指導綱要 (試行)」は, 幼稚園教育の教育課程基準であり, 園と教師の指導の目標・内容・方法を示しているのに対して, 「ガイドライン」は, 幼稚園や家庭において, 就学前の3~6歳児の発達段階にふさわしい学習と発達の促進と幼児の発達の基本的特徴に対する理解を促すための教師や保護者に向けた手引きという側面を有する。つまり, この「ガイドライン」は, 教育政策のようなものではなく, 教師以外にも保護者も含めて呼びかけ, 幼稚園や家庭, さらに社会全体で就学前教育の質を向上させることを意図したものであり (宮本・宋・川上・吉田, 2020), 教育実践レベルにおいて, 「指導綱要 (試行)」以上に, 中国の近年の就学前教育に対して影響力をもつと考えられる。

そこで, 本研究では, 「ガイドライン」の特徴を, とりわけ, 子どもの「主体性」の観点から明らかにする。そして, 明らかとなったことを手がかりに, 中国の就学前教育における子どもの「主体性」の育成について考察することを目的とする。

なお, これまでのところ「ガイドライン」を詳細に

分析した, 日本語で執筆された研究は, 著者らの管見の限り, 宮本ら (2020) のみである。宮本ら (2020) の関心は道徳性の育成にあり, 「ガイドライン」の「社会」に絞って分析されている。また, その研究で採られた分析方法は, 「ガイドライン」を日本語に翻訳したうえで精読し, 特徴的な記述に着目し論考するというものであった。一方, 本研究の分析では, 「ガイドライン」全体を対象とした計量テキスト分析を用いる。

2. 方法

1) 分析対象

中華人民共和国教育部が公表している「3~6歳児の学習と発達ガイドライン [3-6歳児童学習と発展指南]¹⁾」の中国語原文のテキスト部分を分析対象とした。ただし, 表紙, 目次, 各見出し及び項目タイトル, 年齢段階別の目標の表の「3~4歳」などの表記, 「健康」領域の(一)心身状況 [身心状況] の目標1の表中の参照標準 [参考标准] の部分とこれら参照標準の出典を記した注の部分は除外した。

2) 分析方法

(1) 語の抽出と出現頻度

分析には, 樋口 (2020) によって開発された計量テキスト分析ソフトウェアKH CoderオフィシャルパッケージVer.3.02cを用いた。KH Coderは日本語以外にも中国語を含むいくつかの言語のテキスト分析に対応しており, 中国語については句点「。」で文が区切られ, 文の分割(tokenize)にはStanford POS Tagger & Stanford Word Segmenterが使用される (樋口, 2020, p.130-131)。中国語テキストを対象としたKH Coderの分析においては, 分かち書き精度が重要になる。KH Coderは助詞や助動詞などを一定程度自動的に省いて語を抽出する機能を実装しているが, 袁・小林・安藤 (2016) は, 中国語テキスト (中国語で表記された中国特許) を分析対象として, 中国語テキスト専用の特許分析ツールRostNat及びPatAnalyzerの分析結果と, KH Coderの分析結果とを, 分かち書き精度について比較検証し, KH Coderの分かち書き精度はこれら2つの中国語専用の特許分析ツールとほぼ同等の精度を有することを明らかにした。本研究の分析では, 分かち書きの精度をより確実なものとするために, KH Coderによる分かち書

きの結果を中国語を母語とする1名に確認をしてもらい、KH Corderの「前処理」において「分析に使用する語の取捨選択」に係る「強制抽出する語の指定」と「使用しない語の指定」を駆使して必要に応じて修正を行った。なお「前処理」では自動的に助詞や助動詞など汎用的なものは一定程度省かれ、それ以降の分析から除外される。「前処理」実施後、KH Corderの「抽出語」メニューで得た出現頻度付きの抽出語リストを改めて精査し、リストに含まれた汎用的な次の語、すなわち「或」（接続詞：あるいは）、「并」（接続詞：そして、さらに）、「可」（助動詞：～してよい）、「可以」（助動詞：～できる、～してもよい）、「能」（助動詞：～できる）、「会」（助動詞：～することができる）、「要」（動詞：必要とする）、「需」（動詞：必要とする）、「他」（代名詞：彼、その人）、「都」（副詞：全部）、「如」（動詞：たとえば）、「之间」（名詞：～の間）、「不」（副詞：～しない、～でない）、「也」（副詞：～も）、「对」（前置詞：～に対して）、「让」（動詞：させる）は「使用しない語の指定」を行い、再度「前処理」を行い、「前処理」を完了させた（総抽出語数10,238、うち使用語数6,910；異なり語数2,106、うち使用語数1,927）。

語の出現頻度の分析は、KH Corderの「抽出語」メニューの「抽出語リスト」で行った。

（2）階層的クラスター分析

KH Corderの「抽出語」メニューの「階層的クラスター分析」で行った。分析対象語の最小出現回数は20とし、Ward法でJaccard係数を用いた。

（3）「主体性」と概念的に関連性が高い語の文中での意味の分析

「3. 結果」の3）で後述するように、「主体性」や「主体」の出現頻度は0回であったが、「主体性」と概念的に関連性の高い「主动」（自発的）や「愿意」（自ら進んで～する）などに注目した。先に述べた分析方法（1）によって抽出された「主动」や「愿意」などの語が、具体的な個々の文中でどのような意味で用いられているのか文脈を考慮して、①「子どもの主体性」と意味的に重なる語（主語が子どもであり、かつ、「主体性」と意味的に重なる語）②大人の側の主体性を意味する語（主語が大人であり、かつ、「主体性」と意味的に重なる語）、③「主体性」とは異なる意味で用いられている語、の3つにコード化した。文脈の把握は、KH Corderの「KWICコンコーダンス」機能を用

いて一文ずつ実施した。

（4）「ガイドライン」のパートごとの「子どもの主体性」について述べた文の出現率の分析

「ガイドライン」の「説明」「健康」「言語」「社会」「科学」「芸術」の6つのパート全体にわたって「子どもの主体性」について述べられているのか、それともあるパートに偏って述べられているのかを検討するために、上述の（3）で“「子どもの主体性」と意味的に重なる語”にコード化された語を含む文の数を集計し、各パートの文の総数に占めるそれらの割合（出現率）を算出した。そして、その偏りの有無を見極めるために、カイ二乗検定を行った。なお“「子どもの主体性」と意味的に重なる語”にコード化された語を含む文を特定する作業は、該当する語とその語を含む文を表示させる、KH Corderの「KWICコンコーダンス」機能を活用しながら行った。

3. 結果

1）出現頻度上位語

出現頻度上位150語の一覧を表1に示した。

上位5位は、「幼儿」（幼児）：415回、「活动」（活動する（こと））：78回、「生活」（生活、生活する）：56回、「引导」（導く）：49回、「鼓励」（励ます）：44回であった。

2）階層的クラスター分析

図1に階層的クラスター分析の結果を示す。

クラスター1は、「探究する、過程」や「発展（する）・発達（する）、学ぶ・学習する、能力」の語を含む文からなる。これらの文のいくつかの例を日本語訳で示すと、「幼児の発達は継続的かつ段階的な過程であり、それはまた特定の段階的特徴を示している〔説明〕」、「幼児の社会的領域の学習と発達の過程は、社会性が徐々に整い、健全な人格の基礎が築かれていく過程である〔社会〕」、「幼児の科学学習の核心は、探究の興味を引き出し、探究の過程を体験し、初歩的な探究能力を育むことである〔科学〕」などである。

クラスター2は、「事物・物事、見つける・発見する、問題」や「物体、感知する、関係」の語を含んでいる。「幼児の科学学習は、具体的な物事を探究し、実際の問題を解決する過程で、物事の違いや共通点、そして関係性を発見しようとする過程である〔科学〕」、「よく見かける物体の構造と機能との関係に気づく〔科学〕」、

「物事や現象を観察して比較し、その共通点と違いを見つける [科学]」などである。

クラスター3は、《芸術、作品》や《体験・感銘、尊重する、行為・行動》の語を含んでいる。「芸術作品を鑑賞する際の手足の動きや即興模倣など、幼児の

行動を理解し、尊重する [芸術]」、「幼児の芸術表現に対する考えや感情を理解し、尊重し、単純に「似ているか」「良いか」といった大人の基準で評価しない [芸術]」などである。

クラスター4は、《表現する、やり方、感情・情緒、

表1 出現頻度上位150語の一覧

抽出語	日本語訳	頻度	抽出語	日本語訳	頻度	抽出語	日本語訳	頻度
幼児	幼児	415	動作	動作	20	良好	良好である	13
活動	活動すること	78	材料	材料	20	解決	解決する	13
生活	生活, 生活する	56	行為	行為, 行動	20	体育	体育	12
引导	導く	49	過程	過程	20	傾聴	傾聴する	12
鼓励	励ます	44	一定	一定	19	利用	利用する	12
事物	事物, 物事	42	学習	学習	19	想法	方法を考えてする	12
发现	見つける, 発見する	41	特征	特性	19	意义	意味	12
故事	物語	41	听	聞く	18	描述	描写する	12
人	人	39	尝试	試みる	18	教育	教育	12
成人	(成長した) 大人	37	幼儿园	幼稚園, 幼稚園	18	比较	比較する	12
语言	言語	37	支持	支持する	18	玩具	おもちゃ	12
物体	物体	36	讲	話す	18	用	使う	12
做	～する	35	应	応答する	17	简单	簡単	12
喜欢	～するのが好き	35	形状	形	17	给	与える	12
游戏	ゲーム, 遊び	34	方法	方法	17	自然	自然	12
知道	知っている	34	玩	遊ぶ	17	表示	表現する	12
一起	一緒に	33	生活中	生活の中で	17	規律	規則	12
学习	学ぶ, 学習する	33	结合	結びつける	17	内容	内容	11
基本	基本, 基本的	32	具有	持つ	16	分享	共有する	11
方式	やり方	32	参加	参加する	16	动植物	動植物	11
环境	環境	32	经验	経験	16	声音	声, 物音	11
提供	提供する, 供給する	30	给予	与える	16	家庭	家庭	11
经常	しばしば	30	表现	表現	16	工具	道具	11
进行	行う	30	连续	連続	16	感兴趣	興味を持つ	11
图书	図書	29	习惯	習慣	15	文字	文字	11
问题	問題	29	使用	使用する	15	欣赏	鑑賞する	11
别人	他の人	28	变化	変化	15	社会	社会	11
表达	表現する	28	安全	安全	15	绘画	絵画	11
发展	発展する, 発達する	27	情境	状況	15	讨论	討論する	11
能力	能力	27	感受	感じる	15	身体	身体, 体	11
不同	異なる	26	提醒	思い出させる	15	较	比較的	11
体会	体験する	25	看	見る	15	长辈	先輩, 年長者	11
发展	発展, 発達	25	简单	簡単	15	体验	体験する	10
情绪	感情, 情緒	25	要求	要求	15	保持	保持する	10
感知	感知する	25	观察	観察	15	养成	身につける	10
艺术	芸術	25	丰富	豊富	14	方面	方面	10
规则	ルール	25	兴趣	興味	14	画面	画面	10
主动	自発的	24	帮助	助ける	14	美	美しい	10
愿意	自ら進んで～する	24	想	考える	14	群体	集団	10
注意	注意する, 気を配る	24	积极	積極的	14	自主	自主的	10
说	言う	24	遵守	守る	14	表现	表現する	10
关系	関係	23	了解	理解する	13	说话	話す	10
理解	理解する	23	事情	事	13	运用	運用する	10
同伴	仲間	22	到	到達する	13	集体	集団	10
帮助	助ける	22	常见	よくある	13	东西	もの	9
探究	探究する	22	数	数	13	保护	保護する	9
尊重	尊重する	21	机会	機会	13	信息	情報	9
感受	体験, 感銘	21	条件	条件	13	关心	関心を持つ	9
物品	物品	21	民族	民族	13	创造	創造する	9
作品	作品	20	特点	特徴	13	去	行く, 去る	9

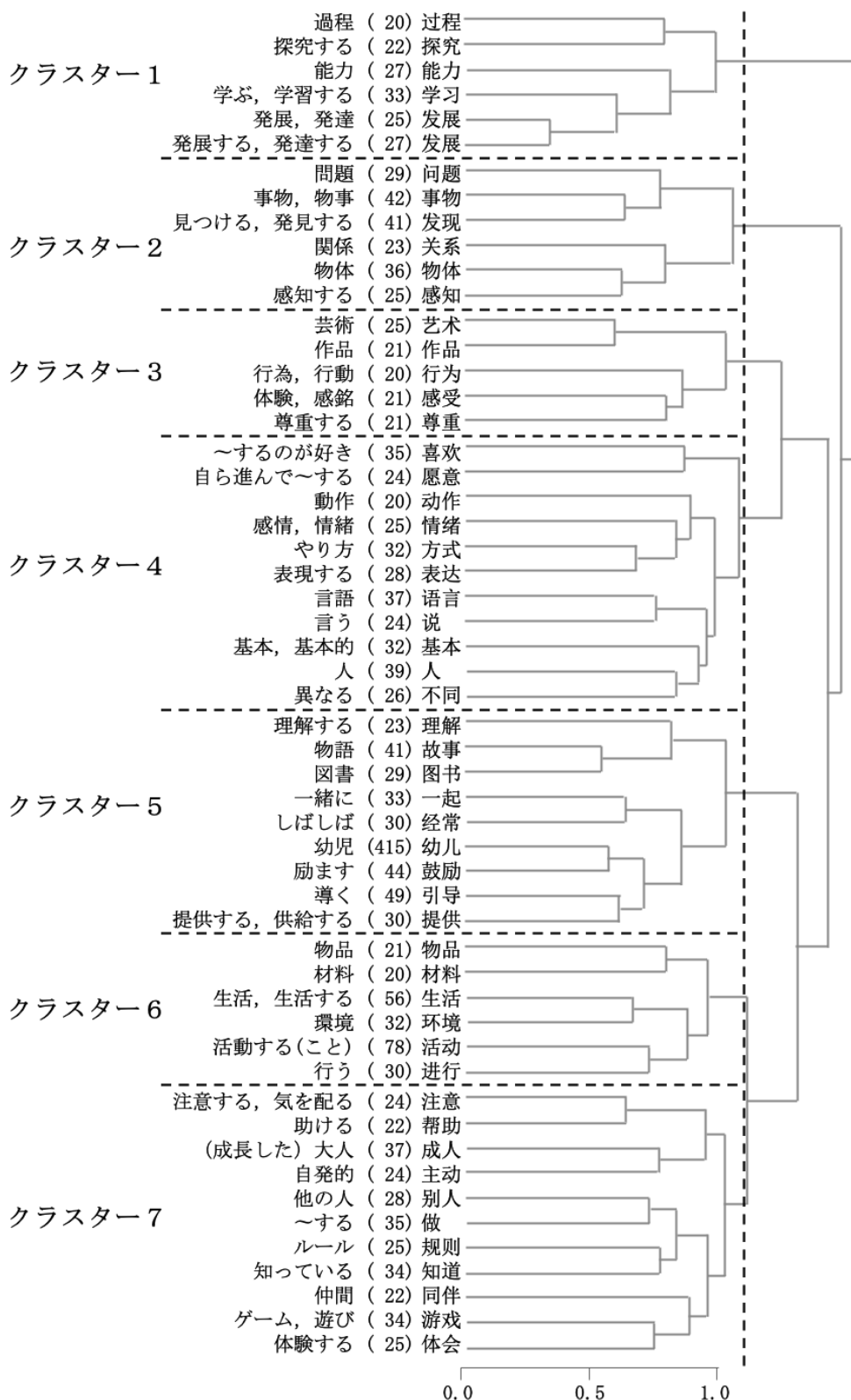


図1 階層的クラスター分析の結果

動作》や《言語, 言う, 異なる, 人, 基本・基本的》や《～するのが好き, 自ら進んで～する》の語を含んでいる。例えば, 「幼児の物事に対する感受性や理解は大人とは異なり, 自己の認識や感情を表現する方法もまた大人とは異なる [芸術]」, 「リズムや簡単なダンスの動作で, 自分の感情や自然界の情景を表現することができる [芸術]」, 「基本的に自民族または地域の言語を話すことができる [言語]」「自ら進んで自分のニーズや考えを表現し, 必要に応じてジェスチャーを使うことができる [言語]」などである。

クラスター5は, 《物語, 図書, 理解する》や《幼児, 励ます, 導く, 提供・供給する, 一緒に, しばしば》の語を含んでいる。「定期的に幼児と一緒に読書し, 彼らの経験をもとに図書の内容を理解するよう導く [言語]」, 「多くの聞く機会と対話の機会を提供する, 例えば, 幼児が興味を持つ話題について頻繁に話したり, 一緒に図鑑や絵本を見たり, 物語を読んだりすることが挙げられる [言語]」などである。

クラスター6は, 《物品, 材料》や《生活 (する), 環境, 活動する (こと), 行う》の語を含んでいる。「幼児が生活の中のさまざまな物品の形状特性を感じ取り, 識別や説明を試みるように導くこと [科学]」, 「幼児が生活の中で細かく観察し, 体験することを奨励し, 芸術活動のために経験や素材を蓄積する [芸術]」などである。

クラスター7は, 《注意する・気を配る, 助ける, 大人, 自発的》や《他の人, ～する, ルール, 知っている, ゲーム・遊び, 体験する, 仲間》の語を含んでいる。「社会生活の実際に結びつけて, 幼児が基本的な行動ルールや他のゲームのルールを理解できるように手助けし, ルールの重要性を体験させ, 自発的にルールを守ることを学ばせることが大切である [社会]」などである。

以上のように, クラスター1には, 過程としての学習や発達が, クラスター2には, 具体物の観察・比較を通した共通点や違いの発見が, クラスター3には, 幼児の行動を尊重し, 大人基準で評価しないことが反映されている。また, クラスター4には, 大人とは異なる幼児の独自の感受性と表現が, クラスター5には, 教師や親が幼児と共に読書し対話の機会を増やすことが反映されている。クラスター6には, 生活環境にある事物の観察と経験の積み重ねが, クラスター7

には, ゲームや遊びを通した仲間とのルールの重要性を学ぶことが反映されている。

3) 「主体性」と概念的に関連性が高い語の文中での意味の分析

「主体性」や「主体」の出現頻度は0回であったが, 「主体性」と概念的に関連性の高い「主动」(自発的)及び「愿意」(自ら進んで～する)が各24回, 「积极」(積極的)が14回, 「自主」(自主的)が10回, 「自发」(自発的)が4回, 「独立」(自立的)が2回, 「独立性」(独立性)及び「积极性」(積極性)が各1回であった(表2の「計」の列)。のべ計80語であった。

これらの語を, 先の分析方法(3)で述べた方法に従ってコード化した結果を表2に示す。80語のうち, 大半の計72語が, 「子どもの主体性」と意味的に重なる語」にコード化されたが, いずれも, 李(2015)の「主体性」の定義の範疇に入るものであった。「大人の側の主体性を意味する語」には計4語がコード化された。例えば, 「(主动) 自発的に幼児に親しみを持って接し, よく一緒に遊んだり活動したりすることで, 幼児が大人との交流に楽しさを感じられるようにし, 親子関係や教師と生徒の関係を築く」という文中の「主动」(自発的に)がこれに該当した。また, 計4語が「主体性」とは異なる意味で用いられている語」にコード化された。「积极」は文脈によってその意味が「積極的」あるいは「肯定的」に変化するが, 「肯定的」の意味の場合がこれに該当した。

表2 コード化の結果

	「子どもの主体性」と意味的に重なる語	大人の側の主体性を意味する語	「主体性」とは異なる意味で用いられている語	計
主动	22	2	0	24
愿意	24	0	0	24
积极	9	1	4	14
自主	10	0	0	10
自发	4	0	0	4
独立	2	0	0	2
独立性	1	0	0	1
积极性	0	1	0	1
計	72	4	4	80

4) 「ガイドライン」のパートごとの「子どもの主体性」について述べた文の出現率の分析

表3に「子どもの主体性」について述べた文の数と文の総数に占める割合を示した。

「ガイドライン」のパートのうち, 「子どもの主体

性」について述べた文の出現率がもっとも高かったのは「社会」（15.58％）であった。次いで高かったのが「芸術」（15.49％）,「言語」（11.45％）であった。一方もっとも出現率が低かったのは「科学」（1.23％）であり, 全体の出現率8.39％に照らしてかなり低かった。なお, カイ二乗検定の結果が統計的に有意であった ($\chi^2(5)=32.708, p<0.01$) ことから, パート間で出現率が有意に均一ではないことが統計的にも確認された。

表3 パートごとの「子どもの主体性」について述べた文の数と文の総数に占める割合

パート	「子どもの主体性」について述べた文の数 (a)	文の総数 (b)	割合 (a) / (b)
説明 (説明)	2	19	10.53%
健康 (健康)	8	201	3.98%
言語 (言語)	15	131	11.45%
社会 (社会)	24	154	15.58%
科学 (科学)	2	163	1.23%
芸術 (芸術)	11	71	15.49%
全 体	62	739	8.39%

4. 考察

「ガイドライン」の特徴について, 本研究の分析結果から考察する前に, 述べておきたいことがある。Gao, H. and Huo, L. (2017) は, 「ガイドライン」の策定時の中国には, 「子どもが何を知って何ができるようになるべきか」という期待を定義する基準がなければ, 個々の教師やプログラムが子どもが何を学ぶべきかを決定することになり, これらの決定が年齢に適切であったり公平であったりしない可能性があるという懸念があったため, このような「基準」の策定がめざされたという状況にあって, あえてその名称は「3～6歳児の学習と発達基準」とはされず, 「3～6歳児の学習と発達ガイドライン (指南)」とされた理由について, 次のように述べている。「幼児の学習および発達の基準は, 一般的に, 言語および読み書き能力, 社会的および情緒的発達, 身体的健康および認知的発達を含むさまざまな領域における子どもの発達に対する期待を反映する声明であると理解されているところであるが, 中国は, 幼児教育基準が個々の幼児を達成レベルに従って「分類」するために悪用される可能性を回避するために, 「基準」ではなく「ガイドライン」にした (p.181)」と述べている。

さて, 本研究の分析結果からの考察であるが, 階層的クラスター分析の結果から述べるならば, 抽出され

た7つのクラスター, すなわち, (1) 過程としての学習や発達, (2) 具体物の観察・比較を通した共通点や違いの発見, (3) 幼児の行動を尊重し, 大人基準で評価しないこと, (4) 大人とは異なる幼児の独自の感受性と表現, (5) 教師や親が幼児と共に読書し対話の機会を増やすこと, (6) 生活環境にある事物の観察と経験を積み重ねること, (7) ゲームや遊びを通した仲間とのルールの重要性を学ぶこと, の7つの事項が「ガイドライン」を特徴づけていると言えるであろう。一見・日暮 (2021) は, 「ガイドライン」の特徴として3点, すなわち「教育内容を「健康」, 「言語」, 「社会」, 「科学」, 「芸術」の5領域に分け, その内容を, 幼児の学習と発達における「目標」と「教育上の意見」の2点から説明している点」, 「年齢段階ごとの発達水準が具体的に示されている点」, 「幼稚園だけでなく家庭においてどのように幼児の発達を保障するかが示されている点」を指摘している。これら3点は, 就学前教育における教師や保育者にとっての「ガイドライン」の役割・機能面からの特徴であるが, 一方, 本研究で明らかとなった7つの事項は, 教師や保護者に向けた, 就学前教育における留意事項とみることができることより, 「ガイドライン」が, 上述した, 幼児たちが達成レベルに従って「分類」されてしまう恐れのある「基準」ではなく, 教師や保育者にとってまさにガイドライン (手引き) 的なものである特徴が明らかにされたと言える。

「1. はじめに」でも述べたように, 本研究での「主体性」は, 李 (2015) に倣い, “「自主性, 能動性, 創造性」を含み, 「社会性」とも関係する概念であり, 個人が, 自らの意思にしたがって選択を行い, 事物に積極的に関わる自立した態度や新しいものを作り出す創造的な意欲と能力, また, 社会をより良くするために他者との協力や連携を保つ態度と能力である”と定義した。これに照らして, 上記(1)～(7)について考えてみよう。「(1) 過程としての学習や発達」の「学習 (する)」及び「発達 (する)」のは子どもであり, 学習や発達は, その子どもが学習する, 発達する過程である, ということを, すなわち, 子どもの自主性や能動性を反映していると言えるかもしれない。「(3) 幼児の行動を尊重し, 大人基準で評価しないこと」及び「(4) 大人とは異なる幼児の独自の感受性と表現」は, 子どもの「自主性, 能動性, 創造性」を損ねるような

幼児の行動理解を慎むようにと教師や保護者に警鐘を鳴らすものであり、この点で子どもの「主体性」と関係があると言える。

また、「3. 結果」の3)で述べたように、「ガイドライン」のテキスト中には、「主体性」や「主体」自体は含まれなかったが、少なくとも「主动」(自発的)、「愿意」(自ら進んで～する)、「积极」(積極的)、「自主」(自主的)、「自发」(自発的)、「独立」(自立的)、「独立性」(独立性)の7種類の語、のべ72語が、“「子どもの主体性」と意味的に重なる語”としてコード化され、いずれの語も李(2015)が定義した「主体性」の範疇に入るものであった。このことから、「ガイドライン」には、本研究でいう子どもの「主体性」に関連する文が一定程度含まれることが示唆された。そして、これらの“「子どもの主体性」について述べた文”は、「ガイドライン」のパートのうち、「社会」と「芸

術」で多くみられた(表3)。表4に「社会」における、表5に「芸術」における“「子どもの主体性」について述べた文”の例を示した。

ところで、鯨岡(2006)は、図2のように、主体の二面性の関係をヤジロベエで表現した。左側には自分の思いを押し出す面が、右側には他者を受け入れる面が描かれ、子どもがこのバランスを持つことが成長において重要であることを強調した。なぜ、この図をここで持ち出したのか、先に結論から言うと、この図の左側が、表5に示した「ガイドライン」の「芸術」における“「子どもの主体性」について述べた文”の例に、そして、図の右側が、表4に示した「ガイドライン」の「社会」における“「子どもの主体性」について述べた文”の例とよく符合すると考えるからである。すなわち、表5に示された文は、図2の左に示された「自分の思い通りに」、「自信をもって」、「自己

表4 「社会」における“「子どもの主体性」について述べた文”の例

-
1. 自ら進んで友達と一緒に遊ぶ。
 2. 楽しいことや面白いことがあれば、自ら進んでみんなと共有する。
 3. 自分のことはできる限り自分でやり、他人に頼らないように自ら進んでする。
 4. 自ら進んで任務を引き受け、困難に直面しても簡単に助けを求めずに頑張る。
 5. 他の人が困っているのを見たときに、自発的に関心を持ち、一定の助けを与えることができる。
 6. 高齢者に礼儀正しく接し、乗車時には自発的に高齢者に席を譲る。
 7. グループ活動に対して、参加する意欲があり、自ら進んで参加する。
 8. 自ら進んで親と一緒に地域のいくつかのグループ活動に参加する。
 9. 自分が通っている幼稚園やクラスを好きで、積極的に集団活動に参加する。
 10. 自ら進んで集団のために働き、集団の成果に喜びを感じる。
-

表5 「芸術」における“「子どもの主体性」について述べた文”の例

-
1. 幼児が自分の好きなダンス、演劇、絵画、工作作品を積極的に紹介する際には、忍耐強く耳を傾け、積極的な反応と励ましを与えることが大切である。
 2. 積極的にアート活動に参加し、自分が特に好きな活動の形式を持っている。
 3. アート活動の中で、他者と協力し合うことができる一方で、自分自身でも独立して表現できる。
 4. ハミング、歌、模倣のパフォーマンスなどの自発的なアート活動を楽しみ鑑賞し、子どもの独自の表現方法を称賛する。
 5. 幼児が自主的に表現や創作を行う過程では、過度に干渉したり自分の意志を押し付けたりせず、幼児が必要とする際に具体的なサポートを提供する。
 6. 幼児の自発的な表現や創造を尊重し、適切な指導を行う。
 7. 豊富な素材(図書、写真、絵画、音楽作品など)を提供し、幼児が自分で選び、好きな方法で模倣や創作できるようにし、大人は過度な要求をしない。
-

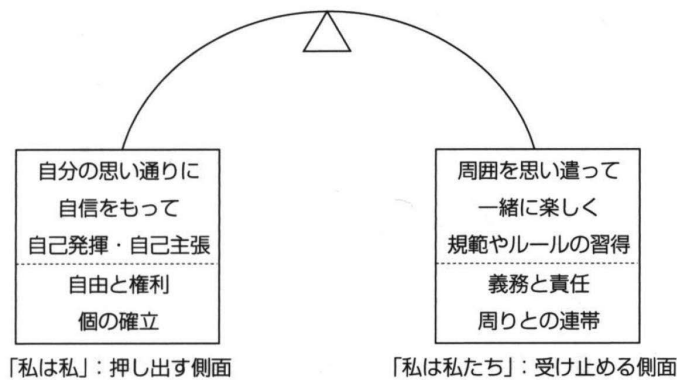


図2 主体であることの二つの側面 出典：鯨岡(2006), p. 99

発揮・自己主張」と重なり、一方、表4に示された文は、図2の右に示された「周囲を思い遣って」、「一緒に楽しく」、「義務と責任」、「周りとの連帯」と重なりと考えられる。このように考えると、「ガイドライン」の「芸術」においては、自分の思いを押し出す面の「子どもの主体性」の育成が、一方「社会」においては、他者を受け入れる面の「子どもの主体性」の育成が大切にされていると言えよう。また、「ガイドライン」の冒頭の「説明」のパートには、幼児の学習と発達の過程においては、5領域の相互浸透と統合が大切であることが強調して述べられていることから、「子どもの主体性」の育成においても、自分の思いを押し出す面と他者を受け入れる面の相互浸透と統合が大切にされていると考えられる。

4) まとめと今後の課題

本研究の目的は、「3～6歳児の学習と発達ガイドライン」の特徴を、とりわけ、子どもの「主体性」の観点から明らかにし、それを踏まえて、中国の就学前教育における子どもの「主体性」の育成について考察することであった。「ガイドライン」のテキストを分析対象とした計量テキスト分析の結果を踏まえ、次の考察がなされた。(1)「主体性」や「主体」の語は抽出されなかったが、関連するいくつかの語が抽出されたことから、「ガイドライン」は子どもの「主体性」を尊重し、育むことを重視していることが考察された。(2)階層的クラスター分析の結果から、「ガイドライン」の文中には、子どもの「主体性」を育むうえでの留意事項が含まれており、教師や保護者にとって、まさに手引き的な内容を「ガイドライン」は含む

ことが考察された。(3)子どもの「主体性」の2つの側面の育成に関することが、それぞれ「社会」領域と「芸術」領域に含まれていることが考察された。

これらの知見は、政策レベルの「ガイドライン」は教育実践レベルに影響をもつと考え、「ガイドライン」を分析することから、教育実践レベルの中国の就学前教育をうかがうことができるという理屈で行われた本研究から導出されたものである。そのため、政策レベルのテキスト上の概念的な知見に留まるものである可能性があるという点は否めない。したがって、本研究で得られた知見について、幼稚園のフィールドワークなどを通して、さらに教育実践レベルの子どもの「主体性」の育成に迫っていくことや、日本との比較といった比較教育的アプローチが、今後の課題として挙げられる。

付記

本研究は令和6年度福山市立大学重点研究の助成を受けて行われた。

註

- 1 http://www.moe.gov.cn/jyb_xwfb/xw_zt/moe_357/jyzt_2015nztzl/xueqianjiaoyu/yaowen/202104/W020210820338905908083.pdf

引用文献

- 儲皖中 (1989) 論人的主体性發展与現代教育主体性原則的建立. 北京師範大学学報, 4, 75-81.
- Gao, H., & Huo, L. (2017). The early learning and development guidelines in China: Retrospective and

- prospective views. In M. Li, J. Fox, and Grieshaber (Eds.) *Contemporary issues and challenge in early childhood education in the asia-pacific region*, Springer, 181-197.
- 樋口耕一 (2020) 社会調査のための計量テキスト分析 [第2版]. ナカニシヤ出版.
- 一見真理子・日暮トモ子 (2021) 中国の幼児教育ガイドライン. 日本保育学会ホームページ<https://jsrecce.jp/wordpress/wp-content/uploads/2021/08/2中国.pdf>
- 鯨岡峻 (2006) ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性. ミネルヴァ書房.
- 李霞 (2015) 文革後中国基礎教育における「主体性」の育成. 東信堂.
- 宮本慧・宋一萱・川上若奈・吉田武男 (2020) 『3～6歳児の学習と発達指南』における道徳性の育成-中国における就学前教育の改革に着目して-. 筑波大学教育学系論集, 44(2), 29-42.
- 袁方・小林義典・安藤俊幸 (2016) KHCoderによる中国特許の分析可能性評価: 中国特許分析ツールの精度評価及び分析事例. 第13回情報プロフェッショナルシンポジウム(要旨集), A31. DOI: https://doi.org/10.11514/infopro.2016.0_77

(2024年10月11日受稿, 2024年11月22日受理)

The Development of Children’s “Subjectivity” in Preschool Education in China: A Quantitative Text Analysis of the “Guidelines for Learning and Development of Children Aged 3 to 6”

IMANAKA Hirofumi⁽¹⁾, LIU Xiangying⁽¹⁾, UYEYAMA Rutsuko⁽¹⁾, IKEDA Akiko⁽¹⁾, and TAKASAWA Kenji⁽¹⁾

This study aimed to clarify the characteristics of China’s “Guidelines for Learning and Development of Children Aged 3 to 6,” especially from the perspective of children’s “subjectivity,” as well as to explore the cultivation of children’s subjectivity in preschool education in China based on these findings. The following conclusions are the results derived from a quantitative text analysis of the “Guidelines” text: (1) Several related terms were identified, even though the terms “subjectivity” and “subject” were not extracted, which suggests that the “Guidelines” emphasize the significance of respecting and nurturing children’s subjectivity. (2) Hierarchical cluster analysis indicated that the “Guidelines” include considerations essential for fostering children’s subjectivity, which serves as a practical guide for teachers and parents. (3) The development of two aspects of children’s subjectivity was found to be addressed within the “social” and “artistic” domains.

Keywords : preschool education, China, subjectivity, Guidelines for Learning and Development of Children Aged 3 to 6, text mining

⁽¹⁾Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University